

言語能力の向上に関する特別チームにおける これまでの議論の取りまとめ（案）

1. 言語能力の重要性について

(1) 「言語」と「言語能力」について

- 言語は、文化審議会答申（平成16年2月3日）¹が国語力について指摘するように、知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成に関わるとともに、文化の継承や創造に寄与する役割を果たすものである。
- 中央教育審議会答申（平成20年1月17日）²では、児童生徒の思考力・判断力・表現力等を育むために、記録、要約、説明、論述といった言語活動の充実が提唱された。これを踏まえ、平成20年3月に告示された小学校・中学校学習指導要領及び平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領では、各教科等において、言葉による記録、要約、説明、論述、討論のほか、歌、絵、身体による表現など、言語及び非言語による学習活動を「言語活動」として重視し、その充実を図っている。
- このように、広義の「言語」には、日本語や英語などの個別言語における話し言葉や書き言葉（文字）のほかに、数字や音符なども含まれ、また、「言語能力」は、話し言葉や書き言葉以外の言語や非言語をも含めた広範な能力として捉えられる場合もあるが、本取りまとめにおいては、「言語」は、日本語及び英語などの個別言語における話し言葉や書き言葉のことを指すこととし、それ以外の数字や音符などを指し示すときは、その都度、それらを明記することとする。³

(2) 教育課程全体を通じて育成すべき資質・能力と言語能力について

- 育成すべき資質・能力の中でも、言語能力を構成する資質・能力は、子供たちの学習や生涯にわたる生活の中で極めて重要な役割を果たすものである。

¹ 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月3日）

² 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月17日）

³ 「言語」と「言葉」は、同じ意味で用いられることが多いが、本取りまとめにおいては、日本語や英語等個別の言語体系に関して表現する際や、「言語能力」「言語活動」のように熟語として用いる場合、「言語と言語能力」のように熟語と並べて用いる場合には「言語」と記載し、個別の言語体系に依らず、共通のものとして表現する際や、言葉遣いや語気なども含めた表現の総体として用いる場合には「言葉」と記載する。

○ 子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言葉を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言葉を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現したり、他者と関わったりする力を獲得していく。教科書や教員の説明等から新たな知識を得たり、事象を観察して必要な情報を取り出したり、自分の考えをまとめたり、友達の思いを受け止めながら自分の思いを伝えたり、クラスで目的を共有して協働したりすることができるのも、言葉の役割に負うところが大きい。

○ このように、言語能力は、国語科や外国語活動・外国語科のみならず、全ての教科等における学習の基盤となるものである。例えば、「論点整理」が提示した資質・能力の三つの柱に照らせば、以下のように考えることができる。

i) 知識・技能

学習内容は、その多くが言葉によって表現されており、新たな知識の習得は基本的に言葉を通じてなされている。また、言葉を使って、知識と知識の間のつながりを捉えて構造化することが、生涯にわたって活用できる概念の理解につながる。

具体的な体験が必要となる技能についても、その習熟・熟達のために必要な要点等は、言葉を通じて伝えられ理解されることも多い。

ii) 思考力・判断力・表現力等

教科等の特質に応じ育まれる見方・考え方を働かせながら、思考・判断・表現するプロセスにおいては、情報を読み取って吟味したり、既存の知識と関連付けながら自分の考えを構築したり、目的に応じて表現したりすることになるが、いずれにおいても言葉が重要な役割を果たしている。

iii) 学びに向かう力、人間性等

子供自身が、自分の心理や感情を意識し統制していく力や、自らの思考のプロセスを客観的に捉える力（いわゆる「メタ認知」）の獲得は、他者からの言語による働き掛けや思考のプロセスの言語化を通じて行われる。また、言葉を通じて他者とコミュニケーションを取り、互いの存在について理解を深めていくことにより、思いやりや協調性などを育むことができる。

○ このように、言葉は、学校という場において子供が行う学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。したがって、言語能力を構成する資質・能力の向上は、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題として受け止める必要がある。

(3) 言語能力に関する課題について

- 本特別チームにおいては、子供たちを取り巻く言葉に関する課題について、以下のような指摘がなされたところである。
 - ・言語能力は、それぞれの発達段階に応じた差異はあるものの、論理的に組み立てて物事を考える論理的思考の前提となるものであり、全ての子供たちに身に付けさせる必要がある能力である。
 - ・情操、情感が発達していく中での中心的要素が言葉であり、言葉によって自分の思いや感情を意識化することで、自分の感情をコントロールすることができる。このため、言語能力を支える心をいかに育むかが重要である。
 - ・子供たちの人間関係の問題に、言葉によるコミュニケーションが深く関わっている。例えば、言葉をネガティブに使って人を傷つけたり、自分が話したり書いたりしたことが誤解なく相手に伝わるといふ思い込みによって人間関係の摩擦が生じたりすることがある。また、インターネット上で一方的に情報等を大量に発信するという現代社会においては、子供たちには、他者の存在を意識しながら発信する力や他者に共感する力も身に付けさせる必要がある。
 - ・言語の背景にある文化的規範を理解していないと、その言語を適切に使うことは難しい。言語を学ぶことは、その言語を創造し継承してきた文化や、その言語を母語とする人々のものの見方や考え方を学ぶことでもある。
 - ・日本人の母語である日本語はほぼ無意識に習得できているため、外国語も日本語と同じように習得できるという思い込みが生じている一方、日本語と外国語の文の構造や語彙、表現などの表面的な違いから、日本語と外国語は全く異なっているもの、学習者が理解しづらいものであるという思い込みも生じており、この両面が外国語の習得の妨げになっている。

2. 言語能力を構成する資質・能力について

(1) 言葉の働きと仕組みについて

- 日本語も外国語も、言語として同じ働き（機能）を持っている。例えば、事物の内容や自分の考え・意図を伝える機能や、相手に行動を促す機能などのほか、言語そのものを語るメタ言語的機能などがある。また、音声や文字を伴い他者に伝達する道具としての機能と、内面化された思考のための道具としての機能⁴の二つに分けることもある。

このような言葉の働きにより、私たちは、時間や空間の制約を超えたコミュニケーションや思考を行うことができる。

- また、日本語をはじめとする様々な言語は、言語としての共通の基盤と、それぞれの固有の特徴（仕組み）を持っている。

⁴ 内面化された思考のための道具としての機能を「内言語機能」と言い、音声や文字を伴わず、心の中で言葉を使って現れる場合もあれば、言語以前の思考や概念として現れる場合もある。

- 特に、言葉には、世界を切り分ける力（分節する力⁵）があり、私たちは、言葉の習得とともに、言葉が持つ概念によって分節化しながら世界を認識している。このため、使用する言語が異なれば、世界の認識の仕方も異なることが知られている。このことは、言語の習得に当該言語を生み出した言語文化の理解が欠かせないことを示している。

（2）言語能力を構成する資質・能力の三つの柱について

- 本特別チームにおいては、言語能力を構成する資質・能力の三つの柱について、別紙1のとおり整理したところであり、その骨子については以下のとおりである。

i) 知識・技能

言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解が挙げられる。

特に、「言葉の働き、役割に関する理解」は、言葉そのものに対するメタ認知のことであり、言語能力を向上する上で重要な要素である。

ii) 思考力・判断力・表現力等

テキスト（情報）⁶を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多角的・多面的に精査し構造化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成、深化する力が挙げられる。

iii) 学びに向かう力、人間性等

言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を深めようとする態度、集団の考えを発展させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚が挙げられる。

⁵ 言葉は、モノやコトを同じ種類の集まりであるカテゴリーに分けている。例えば、日本語では「水」と「湯」を区別して用いるが、英語では温度に関係なく“water”を用いる。つまり、日本語話者は、「水」と「湯」を区別して世界を見ているが、英語話者はどちらも“water”として見ている。このことは、動作を表す動詞などにおいても同様である。このような言語の違いと、それぞれの言語を使う話者たちの世界観や文化の違いについては、多くの研究者によって考察されてきたところである。

⁶ 本取りまとめにおいては、文章になっていない断片的な言葉、言葉が含まれる図表などの文章以外の情報も含めて「テキスト（情報）」と記載する。

○ 特に、「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」を整理するに当たっては、これまでの各種会議等の議論の成果を踏まえ、以下の三つの側面から言語能力を構成する資質・能力を捉えている。

① 創造的思考とそれを支える論理的思考の側面

情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力が重要であり、主にこの側面を高めることにより、言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとする態度につながると考えられる。

② 感性・情緒の側面

言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力が重要であり、主にこの側面を高めることにより、様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にして自覚することを通じて、心を豊かにしようとする態度につながると考えられる。

③ 他者とのコミュニケーションの側面

言葉を通じて伝え合う力が重要であり、主にこの側面を高めることにより、言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度につながると考えられる。

○ これらの①～③の側面は、言葉を使う場面において、個別に働くものではなく、それぞれが互いに関係しながら働くものである。このため、言語能力の向上のためには、①～③の三つの側面をバランス良く育成することが重要である。

○ 以上のような言語能力を構成する資質・能力を踏まえれば、言語能力については、言葉に関わる知識・技能や態度等を基盤に、「創造的思考とそれを支える論理的思考」、「感性・情緒」、「他者とのコミュニケーション」の三つの側面の力を働かせて、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりする能力として整理できるものとする。

○ なお、コミュニケーション能力⁷については、上記の三つの側面のうち、③他者とのコミュニケーションの側面を軸としつつ、他の側面（①創造的思考

⁷ コミュニケーション能力については様々な考え方があるが、文部科学省の有識者会議においては「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義しており、教育課程企画特別部会における議論においても当該定義が援用されていたところである。

とそれを支える論理的思考の側面、②感性・情緒の側面)にも支えられた能力として育成されるものである。

また、人間のコミュニケーションや創造的思考などの諸活動は、言葉によってのみ支えられているものではなく、言葉以外にも、形や色、イメージや、身体の動き、音色やリズムなどの多様な手段が関係している。こうした非言語的な手段に関する資質・能力を、言語能力と相互に関連させながら高めていくことは、感性や情緒等を豊かなものにしていくことにもつながるため、学校教育を通じて、音楽や図画工作、美術、体育等の教育の充実を図ることも必要不可欠である。

(3) 言語能力を構成する資質・能力が働く過程について

- 別紙1で整理された言語能力を構成する資質・能力は、別紙2のように、①テキスト(情報)を理解するための力が、「認識から思考へ」という過程の中で働き、②文章や発話により表現するための力が、「思考から表現へ」という過程の中で働いている。

①テキスト(情報)を理解するための力

- ・テキスト(情報)の構造と内容を把握し、精査・解釈し、自分なりの整合性のとれた考えを形成する力である。
- ・「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「自分なりの整合のとれた考えの形成」のそれぞれの段階において、別紙1のような、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力が働いている。
特に、既有知識・経験によってテキストにない内容を補足・精緻化するなどして推論することや、共通－相違、原因－結果、具体－抽象等の情報と情報の関係性(論理)を吟味・構築すること、妥当性、信頼性等を吟味することなど、情報を多角的・多面的に精査し構造化する力は、テキストの意味を、字句通りというだけでなく理解するために重要な能力である。
- ・なお、「認識から思考へ」という流れではあるが、この流れは常に一方向のものではない。考えを形成しながら、精査・解釈し直したり、構造と内容を把握し直したりするなど行きつ戻りつするものである。
- ・また、テキストの深い理解という点においては、発達段階にもよるが、単に、テキストに表現されている意味を理解するだけでなく、テキストによって得た新しい情報を編集・操作して、自分が既に持っている知識や経験・感情と統合し構造化することや、それをよりどころに、新しい問いや仮説を立てるなど、自分が既に持っている考えの構造を転換することなど、自分なりの整合の取れた考えを形成することが重要である。

②文章や発話により表現するための力

- ・表現するテーマ・内容、構成・表現形式を検討しながら、考えを形成・深化させ、文章や発話によって表現する力である。

- ・「テーマ・内容の検討」、「構成・表現形式の検討」、「考えの形成・深化」、「表現」のそれぞれの段階において、別紙1のような、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力が働いている。
- ・なお、「思考から表現へ」という流れであるが、「テーマ・内容」、「構成・表現形式」、「自分の考え」は、表現する上で密接に関わり合っている。例えば、「考え」が深化すれば、表現する「テーマ・内容」が変わり、「テーマ・内容」が変われば、より良く表現するために「構成・表現形式」が変わることとなる。

このため、表現した後、または、表現しながら、考えを形成したり深化させたりして、より良い表現にするために、文章を推敲したり、発話を調整したりする力が重要である。

- この「認識から思考へ」、「思考から表現へ」の過程を学習の中で行う上で、別紙1の資質・能力の三つの柱のうち、「学びに向かう力、人間性等」が大きな原動力となる。「学びに向かう力、人間性等」で挙げられている態度等が基盤となって、自ら「認識から思考へ」、「思考から表現へ」の過程を繰り返し行うようになり、テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力が育成されることとなる。また、これらの過程を意識的に行うことを通じて、より一層「学びに向かう力、人間性等」が育まれ、さらに「認識から思考へ」、「思考から表現へ」の過程に向かうなどの正の循環が見込まれる。

（4）言語能力の育成について

- 言語能力は、別紙1の資質・能力を、別紙2の過程の中で働かせることによって育成されるものである。その際、資質・能力の三つの柱は、それぞれが独立して育まれるものではなく、それらが働く「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、相互に関係し合いながら育成されるものである。
- 例えば、別紙1の「知識や技能」に挙げられている語句や文の成分などの知識や、読み方、書き方などの技能は、言語能力を構成する重要な要素であり、基礎的・基本的な学力として確実に習得させる必要があるが、その習得に当たり、これらの知識や技能を辞書的に蓄積するだけでは、テキストを的確に理解したり、文章や発話により効果的に表現したりすることはできない。
語句や文の成分などの知識は、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、思考・判断・表現しながら、既存の知識や経験と結び付けたりすることなどによって、様々な場面で活用できる構造化された概念的知識として習得されるようにすることが重要である。
また、読み方、書き方などの技能も、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、思考・判断・表現しながら、変化する状況に応じて主体

的に活用できる技能の習熟・熟達に向かうことが重要である。

- なお、これは、言語の体系（システム）が、固定的なものではないためでもある。例えば、語と意味は、一対一で対応するものではなく、幅をもった面のようなものとして対応しているものである。また、あらゆる表現は、表現する目的、場面、文脈、状況等によって変化するものである。さらに、言語の体系そのものが、地域や時代によって変化するものでもある。
- このため、それぞれの要素を学習しながら、同時に、その要素全体が有機的に結び付いているシステムの仕組みを学習し、その両者が連動しながら常に更新され続けることが重要である。
- したがって、別紙2のような、「認識から思考へ」、「思考から表現へ」、そしてまた表現されたものに対する「認識から思考へ」という、資質・能力が働く過程をスパイラルに繰り返すことが、言語能力の向上を図る手立てである。
- こうした過程の繰り返しは、話したり聞いたり書いたり読んだりする言語活動を通じて行われる。したがって、言葉の学びは、実際に言葉が生きて働く言語活動を通して行われることになる。その時、同時に、言葉そのものについての学びも行われている。

言葉そのものについて学ぶことは、言葉がどのように成り立っているか、自分がどのように言葉を使っているかという足場を意識させることである。このメタ言語的な感覚や気づきを促したり教えたりすることは、子供たちの言語能力を向上させる上で極めて重要である。

3. 言語能力の向上のための言語活動の充実、及び、「国語科」「外国語活動・外国語科」の改善・充実について

(1) 全ての教科等における言語活動の充実について

- 言語能力は、別紙1の言語能力を構成する資質・能力を、別紙2の「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で働かせることによって育成される。この過程の繰り返しは言語活動を通じて行われるため、言語能力の向上を図るためには、発達段階に応じて、言語能力を構成する資質・能力を適切な言語活動を通して育成することが必要である。
- 言語活動には、音声・文字の軸と、表現・理解の軸で4種の活動形態—話す、聞く、書く、読む—がある。また、これらの活動が行われている時には、自己の内部だけで展開される「考える」という活動が必ず伴って行われている。

- 言語活動については、現行の学習指導要領において、全ての教科等において重視し、その充実を図ってきたところであるが、今後、以下の「アクティブ・ラーニング」の三つ視点からの指導改善を実現していくためには、より一層、言語活動の充実を図り、全ての学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠である。なお、体験活動についても、同様のことが言える。

【「アクティブ・ラーニング」の三つの視点からの学習過程の質的改善】

- i) 習得・活用・探究の見通しの中で、教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解につなげる「深い学び」を実現できているか。
 - ii) 子供同士の協働、教師や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
 - iii) 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- また、音や色、イメージ、身体表現などの非言語により対象や事象を捉えることを主とする教科（音楽や図画工作、美術、体育等）においては、非言語をどのように言語化するかというところに言語活動の特徴がある。非言語で捉えたことを言葉にするという言語活動を行うことにより、当該教科における自分の学びをメタ認知し、思考・判断・表現してより深い理解につなげる「深い学び」としたり、学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」としたり、自分の感じたことを言葉にすることで他者に伝え、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」としたりして、学習過程の質的改善を図ることができる。
また、非言語で捉えたことを、例えたり、見立てたり、置き換えたりしながら言葉にする力を育むことは、自己表現の観点や語彙力向上の観点などから、言語能力の向上に大きく寄与するものである。

- このため、次期学習指導要領においては、言語能力の向上のため、全ての教科等において、より一層、言語活動の充実を図る必要がある。

(2) 「国語科」、「外国語活動・外国語科」における改善・充実について

- 国語科においては、小・中・高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力を、言語能力を構成する資質・能力の整理を踏まえ、三つの柱に沿って明確化するとともに、言語能力を構成する資質・能力とそれらが働く過程との関係を踏まえ、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のそれぞれの領域における学習過程と指導事項を整理することを通じて、国語教育を更に

改善・充実することが必要である。

- 「知識や技能」においては、言葉の働きや役割に関する理解を、「思考力・判断力・表現力等」においては、創造的思考とそれを支える論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面から、バランス良く、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりするための力を身に付けること、単に表現された内容を理解したり表現したいことを表現したりするだけにとどまらず、考えを形成・深化する力を身に付けることを重視する必要がある。
- 特に、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙⁸の量と質の違いがあるとの指摘がなされている。また、考えを形成・深化する力を身に付ける上で、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることが必要である。小学校低学年で表れた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響していることを踏まえると、語彙量を増やしたり語彙力を伸ばしたりする指導の改善・充実が重要である。
- また、たくさんの語彙や多様な表現に触れたり、知らないことを知ったり、経験のないことを体験したり、新しい考えに出合ったりして、言語能力を向上させる重要な活動の一つが読書である。このため、小・中・高等学校を通じて、読書活動の充実を図っていく必要がある。
- 外国語活動・外国語科においては、言語能力の向上の観点から、小・中・高等学校教育を通じて育成すべき資質・能力を整理することを通じて、外国語教育を更に改善・充実することが必要である。その際、言語能力を構成する資質・能力の整理を踏まえ、他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する側面を資質・能力全体を貫く軸として重視しつつ、他の側面（創造的思考、感性・情緒等）からも育成すべき資質・能力が明確となるよう整理することを通じて、外国語教育を更に改善・充実することが必要である。
- このため、外国語教育においては、小・中・高等学校を通じて、外国語で他者とコミュニケーションを図る基盤を形成するため、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能のバランスの取れた育成を踏まえつつ、外国語を通じて、言語や文化の多様性を尊重するとともに、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、自律的・主体的に外国語でコミュニ

⁸ 「語彙」の「彙」は集まりの意味。「語彙」とは、言語の基本となる単位の一つである語を、一つ一つの語としてではなく、個々の語が有機的な関係を持って集合する一つの体系として捉えたもの。

ケーションを図ろうとする態度を育成する。あわせて、様々な話題について、外国語で聞いたり読んだりして情報や考えなどを的確に理解したり、それらを活用して外国語を話したり書いたりして情報や考えなどを適切に伝え合ったりすることができるコミュニケーション能力を養うため、小・中・高等学校を通じて一貫した目標、指導内容、学習・指導方法、学習過程、学習評価等の在り方について一体的に検討する必要がある。

- 小学校中学年においては、これまでの高学年における外国語活動の成果を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて、発達段階に適した形で言語や文化について体験的に理解したり、外国語の音声等への慣れ親しみ、コミュニケーションへの積極性を育んだりすることを中心とした外国語活動を導入することが示されている。また、小学校高学年においては、これまでの成果・課題⁹を踏まえ、「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の4技能を扱うことを通じて、より系統性を持たせた教科指導を行う外国語科を導入することが示されている。

(3) 言語能力の向上のための、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携について

- 本特別チームにおいては、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携の効果について、以下のような指摘がなされたところである。
 - ・日本語と外国語を相対的に捉えることによって、その構造や語彙などの仕組み、それらが有機的に結び付いているシステム、その背景となる文化など、日本語と外国語の違いに気付き、それぞれの理解を深めることができる。
 - ・日本語と外国語を相対的に捉えることによって、言語、文化、習慣、時代が違っていても、表面的な違いを超えた深いところでの共通性や普遍性一言葉の働き、人間の心や思考の基本は同じだということが理解できる。
 - ・論理的思考力や批判的思考力などの汎用的な能力や、発表（スピーチ、プレゼンテーション等）、討論（ディベート、ディスカッション等）、論述などに必要なスキルなど、日本語や外国語の運用に共通して必要な資質・能力を、母語である日本語の学習を中心に育成することで、これらの能力を生かして外国語の学習を行うことができる。
 - ・母語である日本語を使って生活している中では、意識的に育成する機会が少ない資質・能力や、外国語における特徴のある資質・能力の育成を、外国語の学習を通して行うことにより、日本語の能力の向上に資する。

⁹ 平成23年度から実施された外国語活動の成果・課題として、児童の高い学習意欲、活動を体験した中学生の成果や変容、指導に当たる教員の肯定的な捉え方、中学校との連携などの成果とともに、「聞く」「話す」だけでなく「読む」「書く」も含めた更なる言語活動への知的欲求の高まり、音声中心で学んだことが中学校での段階で音声から文字の学習に円滑に接続されていないこと、国語と外国語の音声の違いや発音と綴りの関係、文構造の学習において課題があることなどが指摘されている。

- ・単一の言語からは、単一の言語体系の知識、単一の言語体系に依った思考方法、単一の言語で担保されたコミュニケーションの仕方や相手への理解しか学べないが、複数言語を学習することにより、知識や思考、表現に幅ができ、様々な状況に適した思考や表現ができるようになる。
 - ・個別言語によらない、上位処理能力に関する側面（推論能力、談話的能力、一般的な世界に関する知識、メタ認知能力など）については、母語の能力と外国語の能力の間で相関が見られる。
 - ・それぞれの言語の特徴を相対的に捉えることによって、言葉とは何か、言葉が人々の生活の中でどのように働いているかなど、言葉そのものへの意識（メタ言語意識）が呼び起こされる機会が増える。
 - ・メタ言語意識の高まりは、無意識に運用できている日本語への意識の高まりにつながり、言語の学習に対する意欲が育まれ、外国語や言語一般への関心が高まることも期待できる。
- また、言語能力の向上の観点から、国語教育と外国語教育をそれぞれ改善・充実しつつ、相互の連携を図ることで、国語で学んだことが外国語の表現活動に生かされたり、国語と外国語の特徴や違いに気付き、国語を学ぶことに対する関心が高まったりするなど、子供の学習に相乗的な効果が見られるとの例が報告¹⁰されているところである。
- 中央教育審議会の教育課程企画特別部会「論点整理」及びこれを踏まえた小学校部会等の議論においては、小学校中学年における外国語活動や小学校高学年における外国語科の導入に当たっては、言語能力向上の観点から、語順の違いなど文構造などの言葉の規則性に関する気付きを意図的に促す指導や、文字の認識、単語への慣れ親しみ、国語と外国語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き等を促す指導を新たに行う必要があると指摘されている。
- また、国語科をはじめ他教科等と関連付けた学習内容や言語活動を設定することにより、思考力・判断力・表現力や、主体的に学習する態度を育成することを重視するとともに、外国語を読んだり書いたりすることを通じて、言葉の働きや仕組みの面白さに気付きながら外国語を活用しようとする態度を適切に評価することが重要であると指摘されている。
- このような指摘や取組を踏まえ、言語能力の向上につながる効果的な連携を進めていくためには、小・中・高等学校を通じて、発達段階に応じ、国語科と外国語活動・外国語科の指導内容のつながりを可視化することが重要である。

¹⁰ 小学校を対象とした英語教育強化地域拠点事業の中では、(1) アルファベットの文字や単語などの認識、(2) 国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、(3) 語順の違いなど文構造への気付きなどの取組が行われているところである。また、教育課程特例校における実践についても報告されているところである。

その際、各学校において、言語能力の向上に向けたカリキュラム・マネジメントが実施されやすくなるよう、例えば、指導の連携や順序性、言語活動で扱う題材や種類の連携など、具体的な連携の在り方についてわかりやすく整理していくことが求められる。

- 具体的には、
 - ・ 指導の連携に関しては、例えば、小学校第3学年の国語科において、ローマ字による表記を指導するとともに、小学校第3・4学年の外国語活動において、ローマ字とアルファベットの比較を通して、アルファベットの認識や文字と読み方の対応について指導することにより、日本語のローマ字表記と英語のアルファベット表記の違いへの気づきを促すことなど
 - ・ 指導の順序性に関しては、例えば、小学校第1・2学年の国語科において主語と述語との関係について、小学校第3・4学年の国語科において修飾と被修飾との関係や初歩的な文の構成について指導した後、小学校第5・6学年の外国語科において、外国語における主語と述語との関係や語順について指導することにより、日本語と英語の文の構成の違いへの気づきを促すことなど
 - ・ 言語活動で扱う題材の連携に関しては、例えば、国語科と外国語活動・外国語科において、「自己紹介」や「道案内」などの同じテーマの言語活動を設定し、相手の求める情報や言語の特徴が異なることを意識した指導を行うことや、国語科・外国語科において、同じ環境問題をテーマにした文章を教材とし、環境問題に関する知識を、教材を読み進めるに当たって必要な既有知識として共通に活用することなど
 - ・ 言語活動の種類連携に関しては、例えば、文章表現（短文作り、小論文等）、発表（スピーチ、プレゼンテーション等）、話し合い・討論（ディベート、ディスカッション等）などについて、国語科において行い、その方法を学んでから、外国語活動・外国語科において行うことや、パラグラフ・ライティングなどについて、外国語科において行い、その方法を学んでから、国語科において行うことなど
- である。

- 中学校、高等学校においては、教科担任制であることを踏まえると、教員同士の連携が必要不可欠である。特に、言葉を学習する教科である国語科や外国語科においては、言葉で表された内容を学習する教科との連携や、言語活動を行う全ての教科等との連携が求められている。

全ての教科等における言語活動を充実するためには、生徒が話したり書いたりできるという状態が前提として必要であり、生徒が話したり書いたりすることのうち、表現された内容の質は当該教科の指導によるが、表現すること自体の質は、言葉を学習する教科における指導と関わるものであるため、特に、国語教育の充実が求められるところである。

- (4) 言語能力の向上に向けて、「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携を強化するための方策について
- 言語能力は、「国語科」及び「外国語活動・外国語科」が中核となり、学校の教育活動全体を通じて、その向上を図っていくことが必要不可欠である。このため、以下のような事項について必要な方策を講じていくことが重要である。
 - 学校全体としての指導体制
 - ・ 育成すべき資質・能力についての共通理解
 - ・ 学校の教育活動全体を通じたカリキュラム・マネジメント
例えば、言語能力の向上に関する協議の計画的実施や、言語能力の向上を意識した年間指導計画の作成等
 - ・ 「国語科」及び「外国語活動・外国語科」担当教員を中心とする連携体制
など
 - 教員の指導力の向上（教員養成、教員研修等）
 - ・ 言語能力の向上のための教科等を横断した研修の実施
 - ・ 教員養成カリキュラムにおける教科指導法に関する科目において、言語能力のメカニズムの理解やその向上のための指導法についての学習の推進
など
 - 指導内容の連携、教材の在り方、ICT（情報通信技術）等の活用
 - ・ 「国語科」と「外国語活動・外国語科」における学習の連携を意識した言語活動で扱う題材や種類等における連携
例えば、国語科の言語活動で扱われている題材や種類等（日常生活における話題について討論すること、行事等の案内をする文書を書くことなど）を参考に、外国語科においても、同様の言語活動を実施することなど
 - ・ 「国語科」と「外国語活動・外国語科」における学習と、他の教科における学習との連携を意識した指導
例えば、社会科や理科等で習得した知識や考え方をを用いて課題を捉え、議論したりまとめたりする等の教科横断的な発想からの授業展開など
 - ・ 「国語科」と「外国語活動・外国語科」における学習の連携を意識した教材の工夫
例えば、外国語に翻訳された日本の古典、短歌・俳句、現代文等や日本語に翻訳された海外の作品を教材として扱うことなど
 - ・ 「国語科」と「外国語活動・外国語科」における指導の連携や順序性、言語活動で扱う題材や種類の連携など、具体的かつ効果的な連携の在り方が示されている事例の収集・紹介
 - ・ 協働的な学習や、補習指導等における一人一人の進度に応じた学習のためのICT等の活用
など

言語能力を構成する資質・能力（検討のたたき台）

平成28年5月12日
 教育課程部会
 言語能力の向上に関する特別チーム
 資料1（別紙1）

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力、人間性等

○言葉の働きや役割に関する理解

○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け

- ・言葉の位相、書き言葉（文字）、話し言葉
- ・語、語句、語彙
- ・文の成分、文の構成
- ・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章の関係） など

○言葉の使い方に関する理解と使い分け

- ・話し方、書き方、表現の工夫
- ・聞き方、読み方 など

○言語文化に関する理解

○既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解

テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力

【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】

- 情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
 - ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化
 - ・論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
- 構成・表現形式を評価する力

【感性・情緒の側面】

- 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
- 構成・表現形式を評価する力

【他者とのコミュニケーションの側面】

- 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
- 構成・表現形式を評価する力

《考えの形成・深化》

- 考えを形成、深化する力
 - ・情報を編集・操作する力
 - ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
 - ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度

・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団の考えを発展させようとする態度

・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通じて、心を豊かにしようとする態度

・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度

・自分の感情をコントロールして学びに向かう態度

・歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化の担い手としての自覚

言語能力を構成する資質・能力が働く過程(イメージ案)
 ~「国語科」及び「外国語活動・外国語科」を通じて育成すべき言語能力~

平成28年5月12日
 教育課程部会
 言語能力の向上に関する特別チーム
 資料1(別紙2)

認識から思考へ

テキスト(情報)の理解

構造と内容の把握

- 言葉の働きや役割に関する理解
- 日本語や外国語の特徴やきまりに関する理解と使い分け
 - ・言語の位相、書き言葉(文字)、話し言葉
 - ・語、語句、語彙
 - ・文の成分、文の構成
 - ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係)
- 言葉の使い方に関する理解と使い分け
 - ・話し方、聞き方、表現の工夫
 - ・聞き方、読み方
- 言語文化に関する理解
- 既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解

精査・解釈

- 【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】
 - 情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
 - ・推論及び既有知識による内容の補足、精緻化
 - ・論理(情報と情報の関係性：共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【感性・情緒の側面】
 - 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【他者とのコミュニケーションの側面】
 - 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
 - 構成・表現形式を評価する力

自分なりの整合のとれた
 考えの形成

- 考えを形成・深化する力
- ・情報を編集・操作する力
- ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
- ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

表現

構成・表現形式の検討

テーマ・内容の検討

考えの形成・深化

推敲

- 文章の推敲
 - ・構成・表現形式の修正
 - ・内容の再検討、考えの再整理
- 発話の調整
 - ・自分の思いや考えを伝えるための展開
 - ・相手の立場や視点を考慮した展開

文章や発話による表現

思考から表現へ

言語能力を構成する資質・能力（検討のたたき台）

平成28年5月12日
 教育課程部会
 言語能力の向上に関する特別チーム
 資料1（別紙1）

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力、人間性等

○言葉の働きや役割に関する理解

○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け

- ・言葉の位相、書き言葉（文字）、話し言葉
- ・語、語句、語彙
- ・文の成分、文の構成
- ・文章の構造（文と文の関係、段落、段落と文章の関係） など

○言葉の使い方に関する理解と使い分け

- ・話し方、書き方、表現の工夫
- ・聞き方、読み方 など

○言語文化に関する理解

○既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解

テキスト（情報）を理解したり、文章や発話により表現したりするための力

【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】

- 情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
 - ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化
 - ・論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
- 構成・表現形式を評価する力

【感性・情緒の側面】

- 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
- 構成・表現形式を評価する力

【他者とのコミュニケーションの側面】

- 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
- 構成・表現形式を評価する力

《考えの形成・深化》

- 考えを形成、深化する力
 - ・情報を編集・操作する力
 - ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
 - ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度

・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団の考えを発展させようとする態度

・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通じて、心を豊かにしようとする態度

・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度

・自分の感情をコントロールして学びに向かう態度

・歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化の担い手としての自覚

言語能力を構成する資質・能力が働く過程(イメージ案)
 ~「国語科」及び「外国語活動・外国語科」を通じて育成すべき言語能力~

平成28年5月12日
 教育課程部会
 言語能力の向上に関する特別チーム
 資料1(別紙2)

認識から思考へ

テキスト(情報)の理解

構造と内容の把握

- 言葉の働きや役割に関する理解
- 日本語や外国語の特徴やきまりに関する理解と使い分け
 - ・言語の位相、書き言葉(文字)、話し言葉
 - ・語、語句、語彙
 - ・文の成分、文の構成
 - ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係)
- 言葉の使い方に関する理解と使い分け
 - ・話し方、聞き方、表現の工夫
 - ・聞き方、読み方
- 言語文化に関する理解
- 既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解

精査・解釈

- 【創造的思考とそれを支える論理的思考の側面】
 - 情報を多角的・多面的に精査し、構造化する力
 - ・推論及び既有知識による内容の補足、精緻化
 - ・論理(情報と情報の関係性:共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【感性・情緒の側面】
 - 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
 - 構成・表現形式を評価する力
- 【他者とのコミュニケーションの側面】
 - 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
 - 構成・表現形式を評価する力

自分なりの整合のとれた
 考えの形成

- 考えを形成・深化する力
- ・情報を編集・操作する力
- ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力
- ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

表現

構成・表現形式の検討

テーマ・内容の検討

考えの形成・深化

推敲

- 文章の推敲
 - ・構成・表現形式の修正
 - ・内容の再検討、考えの再整理
- 発話の調整
 - ・自分の思いや考えを伝えるための展開
 - ・相手の立場や視点を考慮した展開

文章や発話による表現

思考から表現へ